

～織田信長サミット2009に向けて～



小牧山

戦国に馳せる

滋賀県教育委員会事務局文化財保護課

第17回 天正7年～9年の信長

副主幹 松下 浩

安土宗論

天正7年（1579年）5月、安土城下のはずれにある浄厳院で浄土宗と法華宗による宗論、いわゆる「安土宗論」が行われました。きっかけは、城下で法華宗徒が浄土宗の僧侶に論争を仕掛けたことに始まり、双方とも宗派の長老を招き、浄厳院本堂を舞台に宗論が行われました。

多くの聴衆を集めた宗論は、浄土宗の勝利に終わり、敗れた法華宗の面々は、見物人に袈裟を剥ぎ取られ乱暴されるなど、散々な目に遭います。また、以後他宗に論争を仕掛けないことを誓約する起請文を書かされたのでした。



▲安土宗論の舞台となった浄厳院本堂（重要文化財）

実はこの宗論の結果は、純粹に宗教上の勝ち負けではなく、信長によつて仕組まれたものといわれています。当時法華宗は、京都や堺などの都市部で大きな勢力を誇っており、天下統一を目指す信長にとって厄介な存在だったのです。そこで、この宗論を利用して法華宗の勢力を削ごうとしたというのが安土宗論の真相だといわれています。この真偽は不明ですが、結果として法華宗が大きな打撃をこうむったのは事実で、あながち作り話とは言えないようです。

本願寺との講和と石山合戦の終結

信長を最も苦しめたのは、やはり一向一揆でしょう。法華宗が都市部に勢力を拡大したのに対し、一向宗は農村部に深く浸透していました。特に近江、東海、北陸といった地域は、一向宗の最も盛んな地域です。信長領国とも重なるこれらの地域においては、反信長の一向一揆が頻繁に起こりました。そして、それらの中心にいたのが大坂の本願寺です。

元亀元年（1570年）の蜂起以来、10年にわたって何度か講和を繰り返しながら、両者の戦いは続きました。特に伊勢長島や越前などでは信長軍による殲滅戦が行われるな

ど、信長の一向一揆に対する憎しみの深さがうかがえます。しかし、各地の一向一揆が沈静化され、本願寺と結んでいた戦国武将たちが滅ぼされ、徐々に本願寺は孤立していきま

す。天正6年（1578年）6月、信長が包囲する本願寺に兵糧を運びこもうとした毛利水軍が信長配下の九鬼水軍に破れ、毛利氏は大坂への制海権を失います。これによりさらに孤立を深めた本願寺は、ついに天正8年（1580年）3月、正親町天皇の調停を受け入れる形で信長と講和し、大坂の地を退城します。ここに、10年にわたって繰り返されてきた石山合戦は終結したので

す。本願寺との戦いに勝利したことで、信長の天下統一はさらに一歩、ゴールに近づいていきます。



▲本願寺第11代宗主 頭如
(滋賀県立安土城考古博物館所蔵)

問合先 文化振興課 ☎76-11189